

住井すゑとその文学の里(二十四)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

農本主義者橘孝三郎と犬田卯

橘孝三郎は、犬田卯より2年遅く、明治26年(1893年)に東茨城郡常盤村、現在の水戸市で生まれた。第一高等学校(東京大学の前身)へ進み、同校を中退して帰郷。共鳴しているロシアの文学者トルストイの『農民思想・人道主義』を手本に、橘家所有の田畑300町歩余りを橘農場と称して農場経営を始めた。

やがて橘は、農場経営を土台に、幸徳秋水が主張し続けた原始回歸思想、それに大地主義・勤労主義・兄弟主義を折衷して、独自の『農本主義思想(農業および農村社会を国の本とする考え方)』に到達、世間から注目された。そして昭和3・4年(1928年)〜1929年)から、県内各地、主に農村を講演して歩く。内容は、農村恐慌などに對する問題、日本愛国革新の絶対性(世界の大勢、日本行詰の根本原因、農村学および地方分

権。これは日本愛国革新本義と題して本になる)であつた。

一方で橘は、東茨城郡磯浜町(現大洗町)の日蓮宗護国寺で国家主義者井上日召と出会い、それ以降は国家革新運動にも身を投じた。昭和6年になると、橘の思想(政治・社会に対する考え方)、信条に共鳴している20数名の青年と農場内に、農本主義に基づいて、農村を改革し、農民の地位向上を目的とする愛郷塾を設けた。

愛郷塾の主たる実質的な活動は、愛郷畜産購買販売利用組合を結成しての、肥料、日用品共同購入および農産物の共同販売であった。この活動などを通じて愛郷塾の塾生が次第に増え、県下で400名余になり、29町村に支部が設けられた。

その年の11月、橘は、東京に出て犬田卯や農本主義者らと日本村治派同盟の結成に参加。橘は、『地方自治主義の基礎の上に成立

した中央議會および中央政府をして中央統制の実を完全ならしむる』とし、犬田は、『実践の基礎をわれわれは大衆運動に置き、何等権力的中央組織によらざる』ことという考え方であつた。結局、同盟は実際に何も活動することなく自然に消滅したのだつた。

翌昭和7年1月に橘は、阿見村(のちに町)の航空技術訓練施設霞ヶ浦海軍航空隊練習生古賀清志・中村義雄両中尉の講演依頼で、土浦町の料亭霞月に来た。その席には小園安名大尉(敗戦のとき厚木海軍航空隊司令)ら同隊教官数名と、練習生数名がいた。橘と小園はその後密接に連絡をとる間柄になる。橘は、『資本主義が如何に農村を搾取しているか、3年前に米が一石28円だった、昨年は半値以下、12円だ』という例も引い

て極度の農村窮状からの立ち直る策を述べ、さらには『国家100年の計を樹つる等々、そうして日本における革命の絶対必要性を高調』して話をくくつた。

同年5月15日に、国家改造を叫んで古賀海軍中尉らが決起、これに陸軍士官候補生が加わり、首相官邸(大義首相射殺)、内大臣官邸、警視庁、立憲政友会本部、日本銀行などを襲撃し、橘と愛郷塾塾生7名は農民決死隊と称して都内と埼玉県下の変電所を襲撃した。

――時代はずっと下つて、晩年の住井すゑの抱樸舎を、元橋門下の矢吹正吾という人が何度か訪れたという。

橘孝三郎



晩年の橘孝三郎と筆跡
―土浦市の筑波書林発行

『橘孝三郎』より引用―